

鹿児島県の屋外彫刻

Monumental Outdoor Sculptures in Kagoshima Prefecture

針 貝 綾
HARIKAI Aya

This paper describes about one hundred and ten monumental outdoor sculptures erected in Kagoshima Prefecture from the Meiji period to the present time, and provides information and clarification about their historical background.

Among features characteristic of them as a group two are pointed out here. The first is that there still remain standing in Kagoshima city three Taisho-period portrait sculptures of members of the Shimazu daimyo family. The second is that most of the outdoor sculptures in Kagoshima after World War II depict men of towering achievement in the past, who had connection with Kagoshima.

もくじ

1. はじめに
2. 研究方法
3. 明治期の肖像彫刻 (1868-1912)
4. 大正期の肖像彫刻 (1912-1926)
5. 昭和～平成期の屋外彫刻 (1926-1989)
6. おわりに
7. 作品一覧

キーワード：屋外彫刻，都市景観事業，彫刻のあるまちづくり事業

1. はじめに

鹿児島市内では、一般によく知られ親しまれている西郷隆盛像等の肖像彫刻をはじめ、ステンレスや黒御影石などさまざまな素材による抽象彫刻などを屋外で見ることができる。鹿児島県内に建立されている屋外彫刻の多くを手がけてきた中村晋也は、昨年（平成14年）文化功労者として叙勲され、その功績が認められた。これを契機に鹿児島の屋外彫刻は今後その文化的価値が多くの人々に認識されるようになると思われる。

西洋では、古くから庭園の装飾として寓意的・神話的・象徴的な主題をもった泉が作られたり、街中の広場のような特定の場所や公園には英雄を記念する騎馬記念像などが造られてきた。公園や街路といった公の場所に盛んにブロンズの記念碑彫刻が建てられるようになったのは、鑄造技術が完成し、ナショナリズムが高まった19世紀のことである。屋外彫刻設置の目的は空間の装飾に留まらず、英雄や歴史的な事件や出来事を作品によって遺し、人々に思い起こさせることにあった。しかし、最近では西洋でも歴史的英雄や出来事を記念したり、歴史的人物の栄達や成功を象徴することは少なくなり、代わりに屋外彫刻は周辺環境の美化という役割を担わされてるようになってきている。鹿児島でも西洋の概念に近い屋外彫刻が、同じような様式的な変遷を経て造られてきたと想像されるが、果たして鹿児島県内にはどれくらいの屋外彫刻があるのだろうか。それはどのような理由で造られ、どのような場所に設置されてきているのだろうか。そして、これらの作品の設置に行政や団体、あるいは個人がどのように関わっているのだろうか。ここでは、鹿児島県内に設置されている屋外彫刻の基礎的な事項とその現状について明らかにしておきたい。

2. 研究方法

筆者は、平成13年から平成14年にかけて、鹿児島市、伊集院町、国分市、隼人町、出水市、栗野町、枕崎市、知覧町、開聞町、桜島町にて屋外彫刻と肖像彫刻の現地調査を行った。写真撮影等の現地調査により明らかになった作品の形状、作品名、制作者、制作年、銘記等を年代順に並べ、別途一冊の図版集としてまとめている。また、この現地調査に基づき、鹿児島県立図書館、鹿児島市立美術館、鹿児島市建設局都市計画部都市計画課で資料調査を行なった。

3. 明治期の肖像彫刻 (1868-1912)

東京上野の西郷隆盛銅像は、大衆に親しまれる西郷隆盛のイメージを定着させた像である(注1)。高村光雲によって1897年(明治30)に制作された、その銅像の原型となった木像が鹿児島市の南洲墓地内に設置されていることが写真から確認できる(注2)。この像は、残念だが第二次世界大戦の空襲で焼失してしまったという。西郷隆盛木像はまるで仏像のように眼だけが窓から見えるような形で堂宇内に安置されていた。屋外彫刻ではないが、現在確認できる鹿児島では最初の近代彫刻による肖像彫刻である。

4. 大正期の肖像彫刻 (1912-26)

大正期に鹿児島市内に設置された6体の屋外彫刻が、1927年(昭和3)に出版された新居房太郎編による『偉人の佛』に掲載されている。そのうち《正一位島津斉彬公之像》、《従一位島津久光公之像》、《従一位島津忠義公之像》の三体が戦時供出や戦火を免れている(図1)。これらは現存する大正期の屋外彫刻の貴重な作例である。これら三体の原

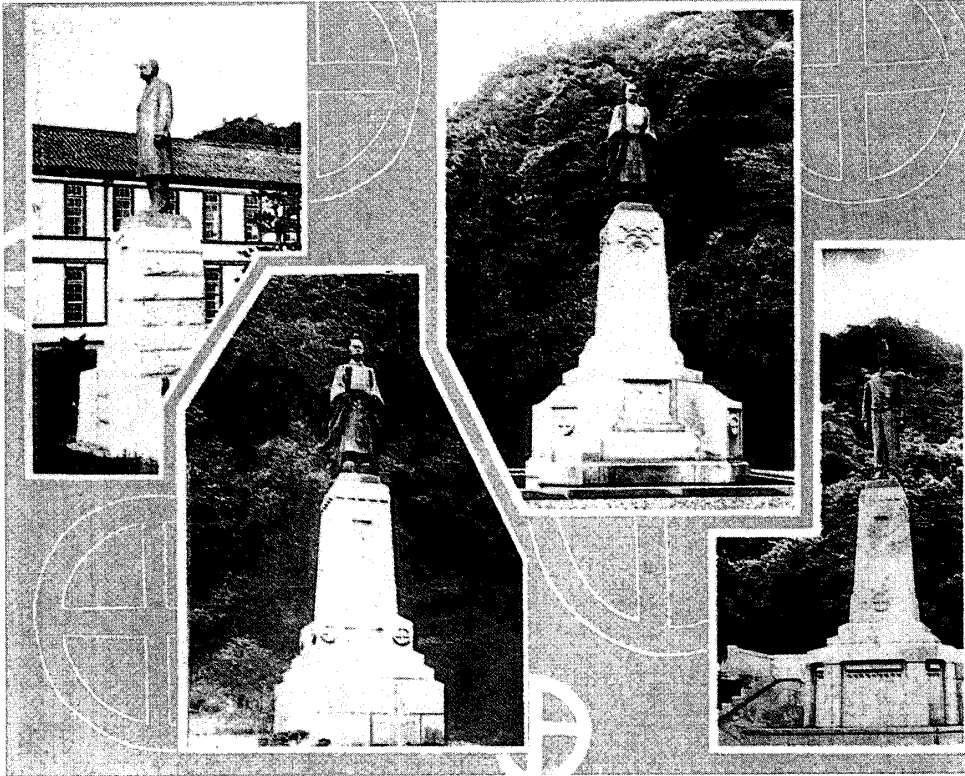


図1 左から朝倉文夫・安藤照《島津珍彦銅像》1922年(大正11), 朝倉文夫《従一位島津久光公之像》, 《正一位島津斉彬公之像》, 《従一位島津忠義公之像》1917年(大正6)

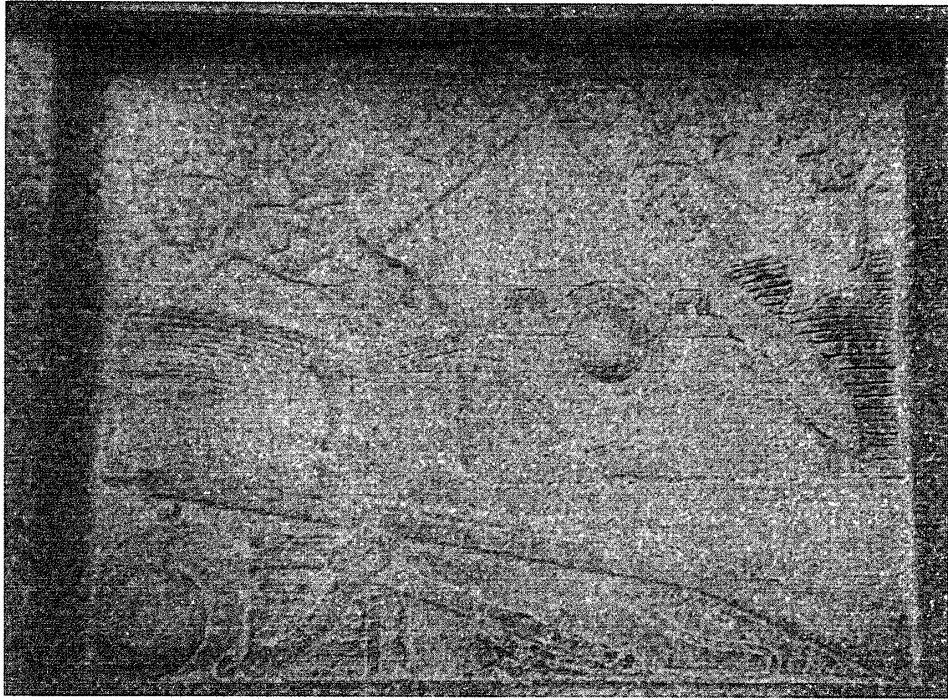
型を当時文展審査員を務めていた彫刻家の朝倉文夫(1883-1964)が1917年(大正6)5月に制作した。いずれも建設者は公爵島津忠重であり,《正一位島津斉彬公之像》は現在の照国神社,《従一位島津久光公之像》と《従一位島津忠義公之像》は現在の城山公園(探勝園)に設置された。『しらゆき 一島津忠重・伊楚子追想録一』の島津忠重年譜中,同年11月22日から25日にかけて,三公(斉彬,久光,忠重)の銅像除幕式を執り行ったとの記述が見られる(注3)。

斉彬と久光像は,両者が藩主の職を退いた後に照国神社の神官となったために神主の装束を着用しており,忠義は海軍の正装である肩に金モールのついた軍服を着用している。これらの銅像の制作者である朝倉文夫は精緻な写実的技巧に秀で,第二次世界大戦前に多くの優れた肖像彫刻を全国に建設した彫刻家で,鹿児島には以上の三体の屋外彫刻の他,1922年(大正11)に《島津珍彦銅像》の原型を安藤照とともに制作し(注4),これは第七高等学校造士館内に設置されたが現在所在が確認されない。

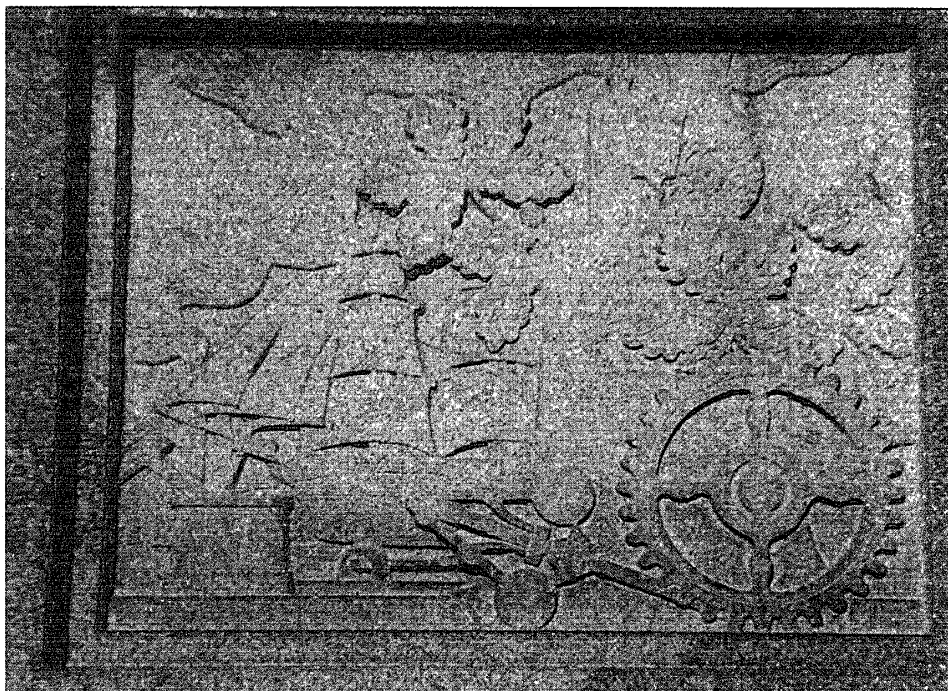
島津四氏の銅像は大きさやその造りに大差はないが,それぞれの台座の形状には相違点が見られる。それらの形状は基本的に立地条件に従うものと考えられるが,注目されるのは島津斉彬像台座フリーズである。これらのフリーズは四面あり,北面から満開の桜を背景に大砲,鉄砲,砲丸,西面には帆船,機械の歯車,煙を立ち上らせる煙突,薩摩切子のカップと瓶,薩摩焼の花瓶,それに柏の葉,南面には芭蕉,蘇鉄などの植物を背景に対角線上に碇を置き,その碇に海軍のマントのような布をかけ,その裾にそろばんと地

図2 《正一位島津斉彬公之像》台座フリーズ

(北面)



(西面)



(南面)



(東面)



球儀，東面には木立のあるなだらかな丘陵を背景に，そこから豊かな恵みをもたらす河の流れと，前景には米俵と斧，トウモロコシと大根の葉のような植物が描かれている。それらは恐らく島津斉彬が振興した軍事，工業，貿易，農業を象徴していると考えられる。肖像彫刻にその人物が関った事柄を視覚化したものを台座に加えてその業績を称えるような手法は，19世紀に西洋で造られたモニュメンタルな肖像彫刻にも見られる手法であり，そのような点においても島津斉彬像は興味深い作例といえる。

5. 昭和～平成期の屋外彫刻（1926—89）

5.1. 昭和初期の肖像彫刻（1926—42）

『偉人の俤』にはまた，1927年（昭和2）に朝倉文夫が制作し，宮之城町盈進高等小学校校庭に設置された《大浦兼武銅像》の図版も掲載されている（注5）。この像の着衣も島津忠義の像と同じく海軍の正装時の軍服で，胸には大きな勲章をいくつも付けている。左手でしっかりとサーベルをたづさえ，少し右足を引いて立つ整ったポーズからは，忠義よりも威厳が感じられる像である。この像も現在所在不明である。

いまひとつの像は，現在確認できる第二次世界大戦前に鹿児島県内に設置されていた唯一の女性像である。乃木大将の妻であった《乃木静子銅像》（図2）は十二単に身を包んだ像で，新屋敷町甲突川河畔の乃木夫人生誕地内に六角の天蓋の下に着座していた。着座の屋外彫刻という点でも珍しい作例である。『ふるさとの思い出写真集

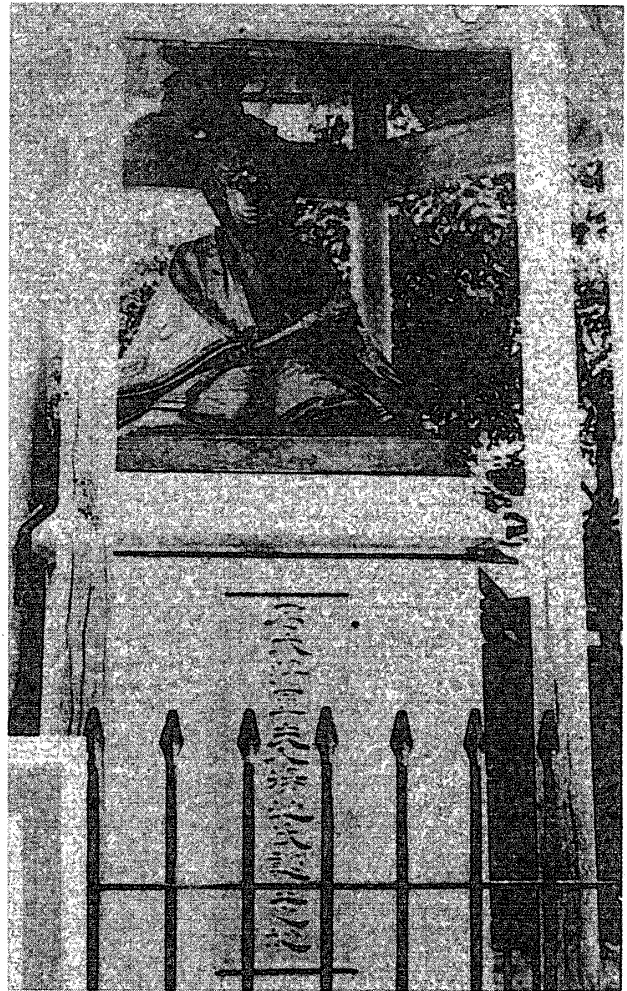


図3 乃木静子像 1919年（大正8）

明治・大正・昭和 鹿児島』によれば，この像は乃木大将を崇拜していた当時神戸在住の村野山人が郷里の誇りとして建てたものであったが，戦時中に金属供出運動のために供出され，現在同地には台座のみが残っている（注6）。

現在もっともポピュラーで鹿児島のシンボルともなっているのが1937年（昭和12）に設置された《西郷隆盛銅像》である。この像は，こちらもまた人々に愛され続けている渋谷のハチ公像の一代目を作った郷土出身の彫刻家安藤照の手によるものである。これは南洲

五十周年祭記念事業の一環として建立され、同年5月23日に除幕式が行われた。現鹿児島市立美術館の地に紋付袴や留袖で盛装した人々やセーラー服姿の女学生たちが詰めかけ、西郷隆盛像の除幕を待つ様子が写真に残されている（注7）。

鹿児島市以外では、1938年（昭和13）1月19日大島で元大島信用販売購買利用組合長森百太郎銅像の落成式が行われたらしい。この像は、フロック・コートを着用した姿で、等身大より高い基壇の上に立っていた。戦局が悪化するのに伴い、この像もまた国へ供出される運命を辿ったという（注8）。

5.2. 戦時下の鉄銅供出（1943-45）

新聞縦覧所が置かれていた知覧の永久橋畔の安藤照作《折田兼至胸像》は、1943年（昭和18）6月15日大東亜戦に供出されたという（注9）。

第二次世界大戦中の鉄銅供出についての資料はほとんどないが、神馬像を供出する際の貴重な写真資料が残っている。川内の新田神社は、春の彼岸の中日に馬踊りが奉納されることで知られる。新田神社山道入口には昭和10年頃、実物大の一体の新馬像が奉納され親しまれていたという。正確な供出年は明らかではないが、このブロンズの神馬像は第二次世界大戦に突入すると鉄砲弾薬となるべく供出されることになった。新馬像が台座から取りはずされる際の写真と皇国幼稚園の園児たちまでもが借り出されて、新馬像が戦争のために供出されるのを国旗を持つ手を元気いっぱい振り上げて見送っている写真が遺されている（図4）。これらの写真は鉄銅供出に関する数少ない貴重な資料である。

戦時下の鉄銅供出についてはまとまった資料がなく、今後調査が必要であると思われる。



図4 新田神社参道入口の神馬像が供出されるのを見送る園児たち

5.3. 終戦～平成期の屋外オブジェ（1945～現在）

大正から昭和初期にかけて造られた肖像彫刻のほとんどは鹿児島市内に設置されていたが、戦後になると鹿児島県内各地に屋外彫刻が設置されるようになった。とはいえ鹿児島市内の設置数は他の地域に比べて圧倒的に多い。

第二次世界大戦後の昭和20年代、鹿児島市内では《フランシスコ・ザビエル銅像》（昭和24）と《平田靱負銅像》（昭和29）がそれぞれの肖像彫刻を安置する公園と共に作られた。竹田春樹『日本のパブリックアート』によれば、日本では1950年頃から全国的に戦時中の銅鉄供出により失われていた銅像を再鑄造あるいは再制作する事業が行われるようになったとあり、両作品ともその時期の作品であることから再制作された作品ではないかと推測されるが、これらの作品についての戦前の資料は未見である。

戦前に制作された作品が戦後鑄造され屋外彫刻として設置されている例としては東郷平八郎の像がある。この作品は昭和16年に制作され、昭和32年に鹿児島市内の多賀山公園へ設置された。『偉人の倂』によれば、東郷平八郎の像は平塚駒次郎という作家によって制作され大正10



図5 《とこしえに》 1974年

年に埼玉県に設置されていた。この像と雨田光平作の東郷平八郎像は、そのポーズ、衣装、持物などが近似しており、これらの像はその関連性が指摘されよう。

一方、五代友厚銅像は戦前では明治33年に大阪商工会議所前に建てられていたものがあつた。この作者は明らかではないが、1961年に坂上政克により鹿児島市に寄贈され、長田陸橋に設置されていた像と着衣と左手を腰にあてて立つのポーズが一致するものの、右手の所作が違うことから、両像は別の作品であり再鑄造ではない。

鹿児島では、その後昭和40年代には《戦災復興20周年記念塔》（昭和40）、《太平洋戦争民間犠牲者慰霊碑》（昭和48）などの抽象彫刻による慰霊碑が制作されるようになった。甲突川沿いの緑地帯が彫刻設置に利用されるようになるのはこの頃からである。昭和50年代になると空前の屋外彫刻設置ラッシュとなり、《西南の役官軍戦没者慰霊塔》（昭和52）や《若き薩摩の群像》（昭和57）などのモニュメンタルな群像が現れた。

また、開聞町の花瀬海岸に中村晋也作《戦没者慰霊塔―死生の扉》（昭和43）、《戦没

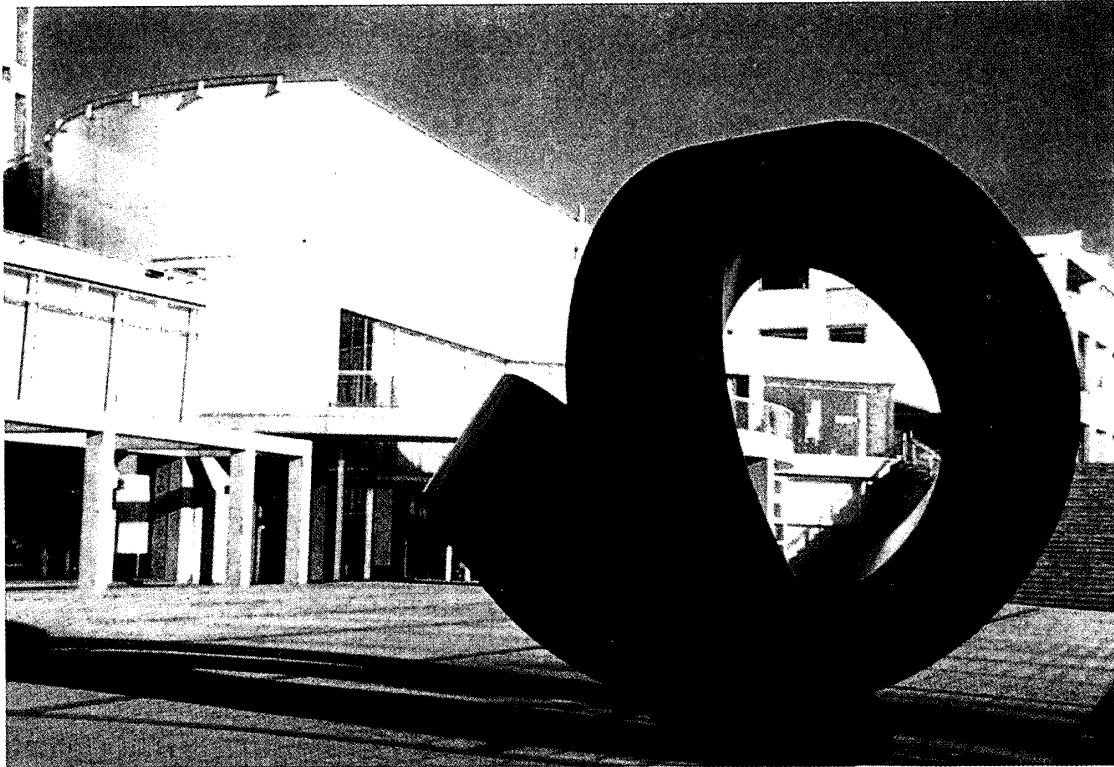


図6 チャールズ・O・ペリー《Sea and Sky》 1996年（平成8）国分シビックセンター

者慰霊塔—戦士の像》（昭和47）が設置された他、知覧では特攻平和会館が開館し、公園内に希望に燃える若き特攻隊員を描いた《とこしえに》（図5）など、鹿児島市外では昭和40年代に戦没者慰霊のための銅像が相次いで設置された。

平成になると、速水史郎や堀内正和らの石を素材とする抽象彫刻が登場し、鹿児島駅前の《太陽の鐘》のような音と組み合わせたモニュメンタルなオブジェや市立科学館前の大型モビール、甲突橋親柱のキネティック・オブジェや水と組み合わせたオブジェなど、ステンレスによる作品も市内随処に見られるようになった。

このような傾向が見られる一方で、鹿児島市では昭和20年代以降も断続的に明治の偉人たちの肖像彫刻が設置されており、この点が他県には見られない鹿児島の屋外彫刻の特徴であろうと考えられる。

他方、国分市では1996年（平成8）に周辺の市町村が合併して新しい複合的な市役所である国分シビックセンターが完成し、敷地内には建築物に合った国内外の作家の彫刻が選定されて設置されている。なかでもチャールズ・O・ペリーの《Sea and Sky》（図6）は鹿児島県内で最も大きな抽象彫刻であろう。

5.4. 鹿児島市の都市景観事業について

屋外彫刻の設置場所としては、県内各地でも公共施設の敷地内が多く、続いて公園内、道路沿い緑地帯が挙げられる。公共施設の建設と施設敷地内への彫刻の設置がセットとして行われるようになってきたのは昭和50年代以降のことである。昭和60年代以降は公園

だけでなく甲突川緑地帯や中央分離帯などパブリックなスペースの有効活用のために彫刻が利用されるようになった。これらの彫刻作品のほとんどは市が設置してきたものである。そこで、ここでは鹿児島市の都市景観事業について見ていきたい。都市景観事業の中で彫刻が関わるものとしては次の5つの事業が挙げられる(注10)。

- ① 彫刻のあるまちづくり事業
(昭和59年～平成4年度)
- ② みなと大通り公園整備事業
(平成元年～5年度)
- ③ ロマンチックオブジェ事業
(平成4～10年度)
- ④ タウンアメニティ事業
(平成4年～)
- ⑤ 太陽の鐘整備事業(平成9年～)



図6 澄川喜一《風》 1996年

このうち、彫刻のあるまちづくり事業は昭和59年から、「花と緑と彫刻のある文化的香りの高いまちづくりを目指すことを基本理念」に掲げ、平田橋から天保山橋までの甲突川緑地の8ヶ所に県内外の彫刻家による具象彫刻を設置してきた。昭和61年には《四季の詩》(楠元香代子)と《思い出・こだま》(山本正道)、昭和62年《陽光を浴びて》(板橋一步)、昭和63年《帽子の像》(佐藤忠良)、平成元年《はばたき》(増山俊春)、平成3年《Quartet(カルテット)》(関谷光生)と《渚》(船越保武)、平成4年に《春のよろこび》(桑原巨守)が設置されてきた(注2)。いずれもブロンズ像である。この甲突川緑地帯を緑と彫刻の道と名づけ、彫刻の設置に際しては作品に合わせて周囲の樹木や植物を配置し、散歩道やベンチ、街灯などが整備され、今では人々の憩いの場となっている。

この事業は平成4年にはロマンチックオブジェ事業と名称を改め、今度はまず作家を選定し、その作家が与えられた場所の周囲の環境を考慮して、作品をデザイン・制作・設置させるという意欲的な試みであった。現在までに速水史朗が大型抽象彫刻《悠雄》(みなと大通り公園・平成4年度)を、堀内正和が《ま四角三つ》(中央公園・平成4～5年度)を、澄川喜一が《風》(水族館北川広場・平成7～8年度)を、速水史朗が《未来へ》(鴨池公園・平成9～10年度)を完成させている。

7. おわりに

第二次世界大戦前、鹿児島には島津家が設置した島津三氏と造士館内の二体の銅像の他に西郷隆盛像と乃木静子の像があった。戦前に造られた、現存する屋外彫刻についてのまとまった資料がないので比較することはできないが、このうち島津三氏と西郷隆盛像は戦時下の鉄銅供出も戦火もまぬかれて良好な状態で今に伝えられており、全国的に見て貴重な屋外彫刻の作例であると思われる。

戦後の全国的な屋外彫刻設置事業の流れについては竹田直樹氏の『日本のパブリック・アート』に書かれているので、それと比較しながら、鹿児島県内の屋外彫刻設置事業の流れをまとめておきたい。全国的に見ると、1950年頃から戦時中の鉄銅供出により失われた銅像を再鑄造あるいは再制作する事業が主流であったが、鹿児島ではこの時期地元出身の偉人の銅像が新しく造られ、その銅像を設置するための公園が整備された。その後、1950年代後半から全国的には国体や博覧会の開催、施設の建設等を記念する目的で男女の裸像が設置されるようになるのに対して、鹿児島では1960～70年代は戦災慰霊碑と偉人の新しい像の建立が行われ、鹿児島での施設の建設等への男女の裸像の設置は1982年以降の公共施設の建設ラッシュに連動して行われた。これは1978年に神奈川県で始まった「文化のための1%システム事業」とも軌を一にするものであると考えられる。

宇部市が1960年に「彫刻のあるまちづくり」事業に着手した後、1968年から神戸市は宇部市とビエンナーレ形式により須磨離宮公園で現代日本彫刻展を開始し、その成果は「30%緑化」構想と結びついた「花と緑と彫刻のまち」構想に活かされることになった。1970年代から全国に広がった「彫刻のあるまちづくり」事業は、鹿児島市では同名の事業の下に「花と緑と彫刻のまち」構想を視座に入れて1984年から本格的に始動して甲突川流域の緑地帯の整備を行った。この事業は、みなと大通り公園整備事業、ロマンチックオブジェ事業へと展開し、単に彫刻の設置にとどまらない、周辺環境へ配慮した公共スペースの整備を進めてきたが、これらの事業は平成10年には収束し、今後はこれまでに整備されたスペースのより有効な活用を考える時期に来ているようである。

また、平成12年10月には鹿児島県は始良町栗野町に霧島アートの森を開館し、県内出身の作家だけでなく、アジアを含めた世界の現代彫刻家の屋内・屋外彫刻を常設、企画展示している。園内では作品展示のほか、立体作品の制作やスケッチなどが行われており、鹿児島県内では今後さらに彫刻を介した文化交流が盛んになると思われる。

注

注1 銅像にまつわる西郷隆盛のイメージ操作については、丹尾安典・河田明久氏が既に重要な問題を明らかにしているので、以下少し長くなるが引用しておきたい。

西南戦争終結の頃、西郷隆盛を描いた錦絵が流行し、戦後は市川団十郎が西郷を演じて大当たりしたという。しかし、こうした「西郷人気は、民心を統合し、国家の方針に沿わせようとする明治政府にとってはあまり好ましい風潮とはいえなかった。大津事件の2年前の1889(明治22)年、西郷は賊名を除かれ、正三位のくらいまで贈られた。そして、そのころから、西郷の銅像建設の話がもちあがり、1892(同25)年に東京美術学校が制作を引き受け、高村光雲が中心となって木型をつくり、鑄造を岡崎雪声が担当し、1898(同31)年12月18日に、あの“上野の西郷さん”の除幕式がおこなわれた。これは有志の募金による建設であったから、国家発議のモニュメントではない。しかし、そこには国家的な意思の投影がある。西南戦争期の錦絵にあらわされた西郷は、おおむねヒゲをたくわえた軍人である。ヒゲのない西郷が画像となったのは、1883(同16)年に大蔵省印刷局のお雇い外国人キョッソーネが西郷従道と大山巖の顔を参考にして作り上げたものが最初であるが、これもまた軍服姿である。あまりにも見なれてしまったせいで、われわれは、上野のつんつるてんの着流しの銅像に違和感を覚えなくなっているが、このようなふだん着姿のモニュメントは、むしろ異様だといってよい。『身代持ちの家畜商が死んだ家長の記念碑を建てたという印象なのである』と評した外国人もいたくらいだ。吉田千鶴子の調べによるなら、当初は『陸軍大將軍服着用騎馬銅像』の計画であったが、騎馬像とするには金が足りず、次に『大將服着用立像』となり雛型まで出来あがったものの、『さる筋から大將服姿に猛烈な反対が起』り、最終的に現在の像になった、という。そこにはあきらかに政治的な意図がはたらいていた。西郷は武人としての牙を抜かれ、犬をつれて歩く人畜無害な人物として、以後民衆のイメージのなかに定着していった。この像は、その人気ゆえに反政府的機運を醸成しかねない動向を、たくみにそらす機能をもになった。」丹尾安典・河田明久『イメージのなかの戦争』岩波書店1996年5-6頁。

注2 芳即正『ふるさとの思い出 明治・大正・昭和 鹿児島』国書刊行会 147-8頁参照。

注3 『しらゆき-島津忠重・伊楚子追想録-』島津出版会 1978年 488頁。

注4 島津珍彦銅像建立については今藤慶四郎・樋渡清廉編『島津珍彦男建像記念誌』に詳しい。

注5 新居房太郎編『偉人の俤』新報社 1928年 72頁。

注6 前掲[注2] 150-1頁。

注7 前掲[注2] 148-9頁。飼い主であった東京帝大の上野博士の死後、ハチを預かっていた植木屋の小林氏がハチを連れて安藤照のアトリエを訪れた時、そこに大きな西郷隆盛の像が2体出来上がっていたというが、これらの西郷隆盛像と鹿児島市の西郷隆盛

銅像との関連については明らかではない。林正春『ハチ公文献集』理想社 1991年 221頁。

注8 『ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和 大島』14頁。

注9 『知覧町郷土誌』昭和57年 1454頁参照。

注10 鹿児島市建設局都市計画課『都市景観事業ガイドー暮らしの中の都市景観』1999年 2頁

参考文献

今藤慶四郎・樋渡清廉編『島津珍彦男建像記念誌』建像委員会発行 1923年

新居房太郎編『偉人の俤』新報社 1928年

芹澤登一『母としての乃木夫人』実業之日本社 1929年

『西南戦争百年 図説 西郷隆盛』講談社 1977年

桜田満『西郷隆盛ーその偉大なる生涯』学習研究社 1977年

島津出版会編『しらゆきー島津忠重・伊楚子追想録』1978年

芳即正『ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和 鹿児島』国書刊行会 1980年

知覧町郷土誌編さん委員会『知覧町郷土誌』1982年

M. A. ロビネット著・千葉成夫訳『屋外彫刻ーオブジェと環境ー』鹿島出版会 1985年

芳即正『調所広郷』吉川弘文館 1987年

林正春『ハチ公文献集』理想社印刷所 1991年

樋口正一郎編『水の環境芸術』柏書房 1991年

藤田観龍『写真集 彫刻のある風景』新日本出版社 1993年

芳即正『島津斉彬』吉川弘文館 1993年

竹田直樹『日本のパブリック・アート』誠文堂新光社 1995年

中村晋也『人間を奏でる』世界文化社 1996年

渡辺昇一『「南洲翁遺訓」を読む』致知出版社 1996年

西郷従宏『元帥 西郷従道伝』芙蓉書房出版 1997年

鹿児島市建設局都市計画部都市計画課編『都市景観事業ガイドー暮らしの中の都市景観』1999年

鹿児島市道路建設課『甲突橋』1999年

鹿児島市建設局都市計画部都市計画課編『鹿児島市の都市計画』2000年

鹿児島県霧島アートの森・空間造形コンサルタント編『鹿児島県霧島アートの森 図録』2001年

鹿児島市建設局都市計画部都市計画課編『鹿児島市都市景観ガイドプラン2002年概要版』2002年

図版典拠

図1, 3 新居房太郎編『偉人の俤』新報社 1928年

図4 青崎速・木場武則『ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和 川内』

国書刊行会 1980年

謝 辞

本調査は、当初平成13年度の地域研究所からの助成による1年計画のプロジェクトであった。予想を上回る量の作品が出てきたために、1年ではまとめられず、本調査報告を書き上げるのに2年を要した。しかし、まだ確認できていない作品があることや、個々の作品や作家についての調査が不十分であること、また関係諸氏へのインタビューができなかったことを鑑みると、本調査は長期的に計画すべきであったと思う。本調査報告はあくまでも中間報告的なものであり、執筆者は今後も折に触れて調査を続け、先輩諸氏のご意見を仰ぎながら徐々に図版集の改訂を行なっていきたいと考えている。

今回の調査にあたっては、鹿児島県立図書館、鹿児島市建設局都市計画課の郡山庄二氏、鹿児島市立美術館の野添浩一氏、谷口雄三氏、鹿児島県立短期大学の山中幸盛氏、尾辻清彦氏、つばめタクシーの中村光二氏、第一交通産業株式会社の上木正俊氏ほかたくさんの方々のご協力や貴重なご助言を頂いた。また、別冊図版集の製本にあたっては地域研究所・事務局に特別にご配慮頂いた。ここに記してお礼を申し上げたい。

作品目録

作品名

鹿兒島市内

作品名	制作者	設置年月日	設置場所	設置者
1. 正一位島津斉彬公之像	朝倉文夫	1917年(大正6)	照国神社境内	島津家
2. 従一位島津久光公之像	朝倉文夫	1917年(大正6)	山下城山公園(探勝園)	島津家
3. 従一位島津忠義公之像	朝倉文夫	1917年(大正6)	山下城山公園(探勝園)	島津家
4. 乃木静子銅像(現存せず)	大塚秀之丞	1919年(大正8)	新屋敷町	村野山人・村野須美子
5. 島津珍彦銅像(所在不明)	朝倉文夫/安藤照	1922年(大正11)	山下町 (旧第七高等学校造士館)	島津長丸
6. 西郷隆盛銅像	安藤照	1937年(昭和12)	中央公園	南洲神社50年奉賛会
7. フランシスコ・ザビエル胸像	柳田昌	1949年(昭和24)	ザビエル公園	朝日新聞社
8. 平田靱負銅像	安藤士	1954年(昭和29)	平田公園	薩摩義士200年祭記念事業協賛会
9. 東郷平八郎元帥像	雨田光平	1957年(昭和32)	多賀山公園	かもめ会
10. 五代友厚銅像	坂上政克	(昭和16年制作) 1941年(昭和16)	長田陸橋袂	鹿兒島市
11. 戦災復興20周年記念塔	福留繁	1981年(昭和56)	泉公園へ移設	鹿兒島市
12. 貴様と俺の碑	中村普也	1965年(昭和40)	甲突川左岸緑地	鹿兒島市
13. 藤島武二像	本郷新	1966年(昭和41)	鴨池公園	鹿兒島市
14. 太陽の賛歌	本郷新	1968年(昭和43)	鹿兒島市立美術館所蔵	鹿兒島市
15. 太平洋戦争民間犠牲者慰霊碑	見島幸雄	1972年(昭和47)	鴨池公園	鹿兒島市
16. 飛翔	中村普也	1973年(昭和48)	市役所前グリーンベルト	南日本新聞社
17. 西南の役官軍戦役者慰霊塔	中村普也	1976年(昭和51)	鹿兒島県立甲南高校	鹿兒島市
18. ライオン像	北村誠一	1977年(昭和52)	祇園之洲公園	ライオンズクラブ国際協会
		1977年(昭和53)	甲突川左岸緑地	

19. 床次竹二郎胸像顕彰碑	朝倉文夫	1978年 (昭和53)	西鹿兒島駅前広場	床次竹次郎顕彰碑建立推進会
20. ザビエル上陸記念碑	ルイ・フランセン	1978年 (昭和53)	祇園之洲公園	ザビエル上陸記念碑
21. 大久保利通公	中村晋也	1979年 (昭和54)	甲突川左岸緑地	大久保甲東百年記念顕彰会
22. 坂本竜馬新婚の旅碑	中村晋也	1980年 (昭和55)	天保山公園	鹿兒島市
23. 薩摩辞書の碑	中村晋也	1981年 (昭和56)	県立図書館入口	鹿兒島市
24. 若き薩摩の群像	中村晋也	1982年 (昭和57)	西鹿兒島駅前	50万都市達成記念行事
25. 聖木の声	内村勝志	1982年 (昭和57)	市民体育館	鹿兒島市
26. 夏の日	立山美次	1982年 (昭和57)	谷山公民館	鹿兒島市
27. あしたの詩	原田茂	1982年 (昭和57)	谷山支所	鹿兒島市
28. 憩	木佐貫熙	1982年 (昭和57)	鴨池公民館	鹿兒島市
29. 紺海に捧ぐ	田中みどり	1982年 (昭和57)	武・田上公民館	鹿兒島市
30. 帽子	溝口守一	1982年 (昭和57)	城西公民館	鹿兒島市
31. 忘れな草	西俣敏弘	1982年 (昭和57)	伊敷公民館	鹿兒島市
32. ファンタジア	楠元香代子	1982年 (昭和57)	吉野公民館	鹿兒島市
33. 紙飛行機	上床利秋	1982年 (昭和57)	東桜島支所	鹿兒島市
34. 朝の調	円鏝勝三	1982年 (昭和57)	文化公園	鹿兒島市
34a. 赤十字看護婦像一博愛の道永遠に	中村晋也	1983年 (昭和58)	県赤十字血液センター	
35. 断	富永直樹	1983年 (昭和58)	文化公園	鹿兒島市
36. 望	木下繁	1983年 (昭和58)	文化公園	鹿兒島市
37. 雄気	晝間弘	1983年 (昭和58)	文化公園	鹿兒島市
38. 麗新	北林治禱	1983年 (昭和58)	文化公園	鹿兒島市
39. 日光に浴す	松田尚之	1983年 (昭和58)	文化公園	鹿兒島市
40. 渚のエウロペー	淀井敏夫	1983年 (昭和58)	市民文化ホール正面入口	鹿兒島市
41. 慈愛	富永直樹	1983年 (昭和58)	市立病院	鹿兒島市

42. 人魚	土田副正	1984年 (昭和59)	天文館	鹿児島市
42a. 子供達の像・キモノ女性	楠元香代子	1984年 (昭和59)	高見橋	
	田中みどり			
	宮里明人			
	奥田光章			
43. 七高生久遠の像	西村祐一・松枝秀晴	1985年 (昭和60)	黎明館	
	・中村茂幸			
44. 四季の詩	楠元香代子	1986年 (昭和61)	甲突川左岸緑地	鹿児島市
45. 思い出・こだま	山本正道	1986年 (昭和61)	平田橋	鹿児島市
46. 陽光を浴びて	板橋一步	1987年 (昭和62)	甲突川左岸緑地	鹿児島市
47. 帽子の像	佐藤忠良	1988年 (昭和63)	甲突川左岸緑地	鹿児島市
48. EOS	中村晋也	1989年 (平成1)	長島美術館	
49. 朝の祈り、姉妹	中村晋也	1989年 (平成1)	谷山サンホール前庭	鹿児島市
50. はばたき	増山俊春	1989年 (平成1)	甲突川右岸緑地	鹿児島市
51. ひととき・憩	竹道久	1990年 (平成2)	護国橋	鹿児島市
52. 林芙美子	楠元香代子	1990年 (平成2)	古里公園	鹿児島市
53. 中馬庚胸像	立山義次	1990年 (平成2)	鴨池市営球場	鹿児島市
54. 岩永三五郎の像		1990年 (平成2)	祇園之洲公園	鹿児島市
55. 風のオブジェ	環境デザイン研究所	1990年 (平成2)	市立科学館	鹿児島市
56. 希望・夢	竹道久	1991年 (平成3)	星ヶ峯ニュータウン星座橋	鹿児島市
57. 大石兵六夢物語の像	野間口泉	1991年 (平成3)	御召覧公園	鹿児島市
58. カルテット	関谷光生	1991年 (平成3)	甲突川右岸緑地	鹿児島市
59. 渚	船越保武	1991年 (平成3)	甲突川左岸緑地	鹿児島市
60. 春のよろこび	桑原巨守	1991年 (平成3)	甲突川左岸緑地	鹿児島市

61a. 南洲翁臥牛翁對話像	1991年 (平成3)	武西郷屋敷跡	鹿児島市
61. 悠雄	1992年 (平成4)	市役所前グリーンベンベルト	鹿児島市
62. 風Ⅲ	1992年 (平成4)	甲突川左岸緑地	鹿児島市
63. 翔	1992年 (平成4)	甲突川左岸緑地	鹿児島市
64. 小松帯刀銅像	1993年 (平成5)	県民文化センター前庭	小右公帯刀顕彰会
65. 夏の思い出	1993年 (平成5)	北埠頭・しおかぜ通り	鹿児島青年会議所
66. ま四角二つ	1994年 (平成6)	中短公園	鹿児島市
67. コーリング2・飛翔	1995年 (平成7)	北埠頭入り口	鹿児島ライオンズクラブ
67a. 原田幸孝夫妻像	1995年 (平成7)	原田学園	
68. 風	1997年 (平成9)	水族館広場	鹿児島市
68a. 馬の親子			鹿児島市
69. 卵の城	1997年 (平成9)	かごしま健康の森公園	鹿児島市
70. 風のリボン	1997年 (平成9)	かごしま健康の森公園	鹿児島市
71. 憩い	1997年 (平成9)	かごしま健康の森公園	鹿児島市
72. 未来へ	1998年 (平成10)	鴨池公園	鹿児島市
73. 調書広郷の像	1998年 (平成10)	天保山公園	前迫初寛・野添武二
74. 太陽の鐘 (過去・現在・未来の円)	1988年 (平成10)	鹿児島駅前広場内交通島	鹿児島市
75. ザビエルと薩摩人の像 (ヤジロウ・ベルナルド)	1999年 (平成11)	ザビエル公園	ザビエル上陸顕彰会
76. 回転する風車の交わり	1999年 (平成11)	甲突橋	鹿児島上陸四百五十周年
77. 緑の翼	2000年 (平成12)	甲突川左岸緑地	鹿児島市
78. CONFLUENCE 日置郡	2000年 (平成12)	永吉町	鹿児島市
79. 雄飛	1989年 (平成1)	金峰町南薩少年自然の家	

鹿屋市

80. 海に生きる

中村晋也

1969年 (昭和44)

鹿屋海上航空基地

川内市

81. 戦艦大和慰霊塔—海炎の像

中村晋也

1968年 (昭和43)

徳之島町

82. ふれあいの塔

中村晋也

1983年 (昭和58)

川内厚生園

指宿市

82a. 指宿海軍航空基地哀惜の碑

作者不詳

1957年 (昭和32)

指宿市

83. 濱崎与八郎氏

中村晋也

1981年 (昭和56)

岩崎美術館

83. 湯浴みの像

木佐貫熙

1984年 (昭和59)

指宿駅前広場

指宿駅前広場ブロンズ像建立発起人会

知覧町

83b. 折田兼至君像

永久橋杖

1963年 (昭和38)

永久橋杖

84. とこしえに

知覧特攻平和会館

1974年 (昭和49)

知覧特攻平和会館公園

84a. やすらかに

知覧特攻平和会館

1986年 (昭和61)

知覧特攻平和会館公園

開聞町

85. 比島戦没者慰霊塔—死生の靡

中村晋也

1968年 (昭和43)

花瀬海岸

86. 比島戦没者慰霊塔—戦士の像

中村晋也

1972年 (昭和47)

花瀬海岸

87. 母と娘の祈り

中村晋也

1991年 (平成3)

花瀬海岸

87a. 永吉實雄翁之像

中村晋也

1975年 (昭和50)

開聞町

伊集院町

88. 島津義弘公

中村晋也

1988年 (昭和63)

伊集院駅前

89. 未来にはばたく少年少女の像

山口五郎

町立図書館前

出水市

90. 鶴

道路沿い

91. 園内彫刻群

クレインパーク

国分市

92. Sea and Sky Charles O.Perry 1996年(平成8) 国分シビックセンター 国分市
93. しゃんしゃん馬 天降川参宮橋親柱 国分シビックセンター 国分市
94. 国分市長像 国分シビックセンター 国分市
95. 群像 国分シビックセンター 国分市

始良郡

96. 単弥呼像 福山町 松下兼知
97. 風景の断片 マルタ・パン みやまコンセール
98. 希望と瞑想 高橋清 みやまコンセール
99. シヤングリラの華 草間弥生 霧島アートの森入り口
100. 猿田彦命像 霧島神宮駅前橋欄干

西之表市

101. 種子島時堯公 中村晋也 1984年(昭和59) 赤尾木城址

宮之城町

102. 太浦兼武銅像(現存せず) 朝倉文夫 1927年(昭和2) 宮之城町盈進高等学校

大島郡

103. 森百太郎銅像 1938年(昭和13) 大島旧電報電話局敷地